

HAMON

特集 私の高校時代

まちライブラリー★スタッフ★に聞いてみた!!



濱町芙三子

ルーズソックス、コギャル。あゆ、アムラーが流行った時代です。私は全くそういった流行りにはのれなくて普通の靴下を履いて、テストで平均何点以上だったという条件でPSを買ってもらい、FF7を遊んでいた記憶しかありません。その時は本ではなくて、ゲームで文章を読んでいた。文章を読むと頭に映像が流れるようになったのはこのせいなのか？



小野千佐子

私の高校時代の現代国語は、夏目漱石と森鴎外だけのようなものでした。今と違い、授業のすすめ方に融通性が高かったのだと思いますが、1学期間『坊ちゃん』だけ、『舞姫』だけという感じ。おかげで、小説をじっくり味わう楽しみを教わりました。



児玉真名

中学で陸上を辞めた反動からなのか、休日などによく走りに出かけていた。定番コースだったのは家から淀川河川敷、家から大日イオンモール。音楽を聴きながらただ無心で走るのが好きで、季節を感じながら街中を駆けることが快感でたまらなかった当時。オカンも私に影響されたらしく、時々理由もなく走りに行くようになり、互いに都合が合えば大阪や神戸マラソンに親子で参加するようになった3年間でした。



野津睦美

友だちと遊び、学校の図書室に通い、家ではひたすら本を読む高校生活。現代国語の成績だけは良かったのですが、他の教科は全然ダメでした。



向祐子

高校時代といえば読書に夢中で、当時はまだ街に個人書店が多かったので、よく訪れては立ち読みして時間を過ごしていた。中国を舞台にした歴史小説が好きで、吉川英治の三国志もこの時期に読破した。今読めと言われたら到底無理なのでやはり若い時に読んでいて良かったなあと思う。



荒井伯子

幼稚園からついぞ「学校」という場所になじめず仕舞いでした。と、いうわけで恥ずかしながら高校時代には何の感慨もないという始末です。ところが、「あん時気にせんでええやんとぼそっというてくれて助かってん」と20数年ぶりに偶然あった同級生から言われ覚えちゃいないけどまんざらでもなかったのかもなと思います。

かじランのちょこっとウィーキング講座

ウォーキングを始めたいあなたにちょこっとアドバイス

「脳は騙されやすい」

歩くことは健康に良い、わかっているけど「寒いし今日はどうしようかな」そんな時はとりあえず家から出てちょっとだけ歩いてみましょう。数歩の行動が意識や気持ちを引き出して、いつものように歩くことができます。

あなたの脳は行動によって騙されるのです。



特集 私の高校時代

清野志保子

私はバドミントン部に所属し、とにかくクラブに明け暮れる日々でした。夏休みも毎日練習、合宿では早朝から急坂を駆け上がり、炎天下の中熱くなった地面に手をつけて逆立ちをして鍛え、クーラーもない体育館で練習をしました。弱小クラブだったけど、ほんとに毎日よく練習したなと思います。もう2度とあんなに運動できません。あの頃は、若かったな～。



川上律美

高校時代は、私にとってターニングポイント。新入生歓迎会の演劇部の公演で、素敵な先輩女性に心撃ち抜かれ、演劇部に即入部。なんともミーハーな役者としての第一歩。でもそれがなければ、多分今の私はいないだろう。



笠松見好

高校時代に目覚めたもの。それは古着屋さんデビュー。素敵な生地のコートやレザーのジャケットにベルボトム。今は着ることは少なくなりましたが、今でも「昭和」時代のものが好きです。



波々伯部恵子

当時の親友から好きそうだからと寺山修司の本をもらい、70年代の活気ある雰囲気が好きになり、その流れで美輪明宏さんを知り、演劇を観て感動していました。高校時代は同じ趣味の友人は少なく、芸大に行ったら同じ趣味の人がいるだろうとワクワクしていたのを覚えています。あの時美輪明宏さんの演劇を観れたのは今でも宝です。



川原紗英子

勉強は一切しない、人生の休憩時間。春は校舎の窓から桜ばかり眺めていた。平日はまっすぐ家に帰って吉本ばななど沢木耕太郎を繰り返し読む。休日はレンタルビデオをかりて映画を観る。時々、1人で渋谷に遊びに行き映画を観る。CD屋や音楽のライブへ行く。私の浪人時代に続くボンクラ人生の根っこを備えた最良の日々。

進め！ 演劇少女

まりもも

高校時代、キラキラした恋の一つでも語りたところだが、ここは、演劇部での話を。

中学時代演劇部だったので、高校でも演劇部に入りたいと思い迷わず入部。先輩は部長副部長の三年生2人。二年生はおらず、私達一年生は男女6人。三年生は文化祭で活動終了が決まっているので、一学期の中頃には次の部長を選出しなければならない。そこで問題。さて、次の部長ってどうやって決めるの？ まあ、部活あるあるで、大体は経験者から選出される。なので、経験のある二人の内、私が選ばれた。

経験はあるが、部長なんて初めてのことなので、ここからが大変。部活以外に運動部も含めた部長会議や練習メニューの組立など、することは山積み。練習は高校の外周のランニングから腹筋などの体力作り、発声練習、エチュードなど、いわゆる【総合芸術】なので、練習も様々。

そして練習の成果の発表、年に数回ある公演。その中でも一番力が入るのが文化祭。この日は各部活動で演劇部が主役と言っても過言ではない(笑)。演目も大がかりな物を選ぶので、台本も分厚く覚える量も多い。それによって背景も大がかりになる。練習も普段は週4日だが夏休み明けからは毎日になり、遅くまで練習や小道具作りなどの時間に費やす。文化祭当日は始発で登校、部員だけでは手が足りず、照明の展開や背景換えなど、普段帰宅部の友達にも手伝ってもらい、何とか無事に終了する。

練習は嫌いだし、小道具や衣装作りも当時は苦手だったので、楽しさよりしんどさが多かったが、それでも、幕が上がる瞬間のドキドキ感と、幕が降りた時に降る拍手の鼓動は舞台上に立った人間しか与えられないご褒美。客席から観る側になった今でも演劇のライブ感はワクワクする。

演劇少女、そう心はあの時のまま変わらない。



成瀬に救われた高校時代

はら

私のふるさととは滋賀県である。最近、40年前の茫洋としたわが高校時代を、「成瀬あかり」の生きざまが救い上げてくれた。成瀬は、宮島未奈先生の小説「成瀬は天下を取りにいく」「成瀬は信じた道をいく」の主人公である。成瀬の青春に仄暗い揺らぎは一切ない。彼女のまっすぐで硬質な姿勢がまぶしく、エールを送りたくなる存在である。そして、彼女という存在の構成に不可避な要素がある。それが、滋賀県の大津なのである。彼女は惜しみなくわが郷土に愛を注ぐ。

「ときめき坂」はそのままの名前でほんとに実在している。膳所駅から元西武百貨店までのときめき坂のはじまりには、私が定期試験の打ち上げに友人とパフェを食べた不二家があった。今はご飯屋さんになっている。卒業する先輩に捧げたフリージアの花束は、白亜のペンション風の花屋さんで購入した。鳶がからまりまくる威風堂々の貫禄でまだ現役、そこにある。創業50周

年だそう。ときめき坂の終わりは、閉店時間まで友人と洋服を選んだ西武百貨店があった。もう、マンション群となっている。しかし、小説に刻まれた西武百貨店終焉の様子は、ご当地民の哀惜を永続的に慰撫してくれる。見届け人の成瀬に、感謝の涙である。

再び脳裏に蘇った高校時代の私、集英社のコバルト文庫を夢中で読んでいた。特に氷室冴子先生の「クララ白書」と「アグネス白書」が、私のバイブルだった。北海道で女子ばかりの寄宿舎に暮らす主人公「シーの」の中学・高校生活を描いた小説である。様々な背景の級友、憧れの先輩、恋バナ、寄宿舎のコミュニティ文化が味わえる。

素晴らしいのが、集団の同調圧力の息苦しさを読み手に一切感じさせなかった作者の手腕である。小説には、読み手をパラレルワールドに誘い楽しませながらも、自分の世界も捨てたもんじゃないよと肯定させてくれる力がある。

聖地巡礼してみよう、ふるさとの栄枯盛衰を味わい、成瀬とときめき坂を歩こう。

アイドル歌手が全盛期だった頃、
様々な歌番組を夢中で観ていた私に衝撃の出来事が起こった日を今でも鮮明に覚えている。
校舎の中庭で同級生の女子が泣いているのだ。訳を聞いたら
ジョンレノンが死んだというのだ。
ジョンレノンって誰？と聞いたら
ビートルズのメンバーだという。
ビートルズの名前は聞いた事はあるが、
それ以上の情報は皆無だったので、
正直、何故そんなに泣いてるのか、
全く共感出来なかった。
それより異国のスターが射殺された
ニュースに涙している同級生に
心底驚いたのだ。
自分の知らない世界をこの子は知っていて
その世界をおもいきり追求してる姿に
憧れ、そこから外国人アーティスト

(当時は外タレと呼んでいた)に夢中になり
デュランデュラン ワム マドンナ
カルチャークラブ マイケルジャクソン
シンディーローパーetc
様々なコンサートに出向いていく
日々となった。
今でも当時の曲が流れると自然と
体がリズムを取り出す。
何年か前にディスコのマハラジャが復活をはたし、中高年世代に大人気だという
ニュースは知っていたが、
過去のノスタルジーと思っていた私が
ひょんな事から行ってみたら
タイムスリップしたかの如く高校生の頃のように踊っていた。
今も時々通っている。
私の高校時代は続行中なのである。

みぼりん

<小説>

駅前電話ボックス

梶野 猛

カラン、カラン。「大当たり。3等賞」椅子に座ったじいさんが面倒くさそうに言った。年末で賑わう商店街から外れた路地裏で1回だけ抽選箱から引いた紙には3等と書かれていた。「3等は何をもらえるんですか」こんなうらぶれた抽選会場ではせいぜい調味料セットだろうと、田中は期待もなく聞いた。

「3等は1回限り、過去の好きなところに行くことができる、タイムトラベルおひとり様だね。有効期限は1週間、1月5日までだよ。気を付けてな。」

「そうですか」田中はばかばかしくなってQRコードが入った紙片をポケットに突っ込んでその場を離れた。

「田中君、童話作家に憧れてるって言ってなかったっけ？」

元日にlineで送った年賀状にミホから返信があったのは5日の昼下がりだった。田中とミホは高校生の頃から友達。お互いに結婚もして、年賀状の挨拶だけの時期もあったが、歳を取って、同窓会や同級生と飲むこともあって、今は、lineで近況報告をする程度の間柄だ。

「田中君、童話作家に憧れてるって言ってなかったっけ？」か、田中はその画面を見ながら少し胸がうずいた。年賀状に田中は1月から「まちライブラリーのスタッフとして本に囲まれる毎を送ります」と書いていた。それを読んでミホはそんなことを思い出したのかもしれない。確かに、高校生の田中はミホに言った。正確には「児童文学が好きで作家になりたい」と夢を語っていたのだ。そして、その直後にミホに告白した田中は見事に振られた。田中はミホがその事を覚えているのだろうかと思った。

高校生の頃の男子は、田中に限らず女の子と付き合いたいという思いが脳みその90%を占めている。田中は、まったくもてなかった。ぶくぶくと太って、運動はダメ、勉強もできるわけではなかった。田中が通った地元の高校は公立でありながら運動部もけっこう強かった、ラグビー部は花園に行くほどだ。運動ができる同級生はもてた。と思う。頭のレベルも中の上ぐらいの高校だったが、少しできる人はそこそこの大学を目指せるほどには頭がよかった。高校生の田中は「何物でもない、付き合いが良くて、ちょっと面白いだけの僕がもてるわけがないか」と思っていた。

田中は考古学研究部に2年生の頃から入っていた。特に考古学に興味があったわけではない。ミホがいたからだ。文化祭の前は展示物を作るために遅くまで社会科教室にいた。帰りは皆で学校近くのドムドムでバターコーンを食べながらおしゃべりをした。現地取材と称して明日香村にも行った。少しミホとの距離も縮まったように思った田中は、3年生の文化祭が終わった頃に告白した。実にあっさりと振られた。そうだ、ミホは「ごめんね、

私、山下部長とつきあってる」と言った。

当時のことを思い出しながらポケットを探ると『タイムトラベル1回券』が出てきた。田中は過去に戻ることができたならあの告白を止めてやりたいと思った。ばかばかしいと思いながらスマホでQRコードを読み取った。

『行きたい過去を心で強く思いだしてから、スタートを押ししてください。タイムトラベルは20分間です。お楽しみください』

田中は高校3年生の駅前電話ボックスを思い浮かべてスタートを押しした。

駅までの道は霧雨のような雨が降っていたが、田中は傘を持っていなかった。角を曲がると駅に着く。霧雨の向こうに映画館があった。「銀河鉄道999」の看板が掛かっていた。映画館の前には電話ボックスが二つ。その先が駅だ。電話ボックスの前のガードレールにはこの季節には不釣り合いなEシャツを着た小太りの男がぼんやりと座っていた。田中はすぐに気が付いた。「あれは僕だ。高校生の僕だ。そうだ、あの電話ボックスからミホに電話で告白をしたんだ」ガードレールに座った男は放心状態でこの世の終わりのような顔をしていた。振られた直後の顔そのものだ。

「しまった、もう告白してしまったあとだ」田中は男の姿を見ながら思った。「彼のところに行って声をかけてやろう」

「大丈夫だよ。この先も君は女の子からもてることは断じてない。だけど、綺麗かどうかはともかくとして、しっかり者の嫁さんと結ばれる。美人かどうかはともかくとして、性格の良い一人娘にも恵まれる。その太った体形はずっと維持するけど、50歳で一念発起してダイエットをする。そしたら、52歳でフルマラソンを走るんだ。童話作家にはならなかったけど、62歳で絵本を作って、いろんな文章を書いている。心配するな。落ち込むな。君の未来は明るい」

「よし、声をかけてやろう」田中は電話ボックスに向かって歩きだした。近づくにつれて彼の姿はぼんやりと薄くなっていくようだった。いや、彼だけではない。電話ボックスも「銀河鉄道999」の看板もぼんやりとしてきた。電話ボックスがあったはずのところまで来たが、それはなく、彼もいなかった。映画館はスーパーマーケットになっていた。田中は我に返った。ここにあった映画館は30年以上前に閉鎖されている。公衆電話なんぞ、ずいぶん前から見かけなくなった。

タイムトラベルは終わっていたのだ。ぼんやり立ちすくむ田中のとなりでじいさんがつぶやいた。「過去の人と会話するのは特等賞だよ」「3等賞で過去を覗けるだけ」

田中は思った。「声をかけなくてよかった。告白を止めなくてよかった。彼は大丈夫だ。」

田中はスマホを取り出した。妻と娘のグループlineにメッセージを送った。「今から帰ります。夕食は鍋が良いね」

完

日生球場がキラキラ輝いていた頃



1963年ボクが小学3年生だった時、今は亡くなった親父に生まれて初めて連れて行ってもらったプロ野球の球場。それが現在キューズモールに姿を変えた日生球場でした。

座った席は右翼側外野席でしたが、夕暮れから空が闇に包まれるに連れて、照明塔のカクテル光線に照らし出された緑色の芝が徐々にキラキラと輝きを増して目前に鮮やかに浮かび上がる。『何てステキでキレイな光景なんだろう！』幼な心にその景色はくっきりと脳裏に焼き付き、今も目を閉じればその鮮やかさが蘇ります。

晩年、日生球場は狭くて設備の古い球場と揶揄されましたが、今のドーム球場ではこんな天空と芝が織りなす大パノラマを観ることなんてできません。

当時日生球場を本拠地としていた近鉄バファローズは万年最下位の弱小チーム。しかしボクが生まれて初めてプロ野球を観戦したその日は珍しく近鉄が東映にダブルヘッターで連勝したものですから、すっかり近鉄ファンになってしまったボクは以降42年間球団が消滅する日まで熱烈に近鉄を応援し続ける羽目になるとはその時夢にも思いませんでした。

それから何年も時は流れて、大学卒業後いろいろの

徨って地元のテレビ局に中途入社したボクに思いもかけぬ待望の時？が到来しま

した。番組制作職で中途入社したボクでしたが、当時のテレビ大阪は規模がまだ小さく制作部とスポーツ部が分離しておらず、両方を兼務することに。

『どこのチームを担当したいんだ？』と尋ねられて普通は皆『阪神タイガース』と答える所を迷わずに『近鉄バファローズです！』と答えて、他に希望者もおらず近鉄担当にすんなり任命され、10年間近鉄の取材を続けさせてもらう事ができました。今から思えば、自分の好きな事と仕事が一致した至福の時でもありました。

初めて入る日生球場の記者席。すでに老朽化して狭く汚れた記者席と言われていましたが、ボクにとっては幼い頃心ときめかせて覗き込んだ憧れの記者席。胸の鼓動が高なるのが自分でも分かりました。日生球場が姿を消して今年で早28年目。この球場にはさまざまな思い出が凝縮されています。

歓喜した日や屈辱の日の思い出も・・・我が青春のいや我が人生の日生球場、本当にどうもありがとう。

川人一生（テレビ大阪OB）

フィジーでの留学生活 1

はじめまして(^^) 高校2年の上原智子と申します。生まれも育ちも森ノ宮。幼い頃より大阪城公園でわんさか走り回っていた結果、今では全国インターハイ出場ランナーに成長しました。このたび、8月に行った留学体験について執筆の機会をいただきました。拙い文章ですが、ぜひお付き合いください。

私は8月7日から28日までの3週間、フィジー諸島へ留学しました。フィジーと言っても、あまり馴染みのない方のほうが多いと思います。フィジーはオセアニアに位置する人口約90万人の小さな島国です。有名なものといえば、なんといってもラグビー。2016年リオデジャネイロオリンピックでは7人制ラグビーで金メダルを獲得し、国中がお祭り騒ぎになったそうです。ちなみに、フィジーの子どもたちは大谷翔平のことを知りませんが、自国のラグビー選手の名前はすらすらと言えるんです（笑）。

では、なぜ私がフィジー留学を選んだのか。それは、私の将来の夢である「子どもを幸福にできる教育者」になることに深く関係しています。私の母は小学校教員で、その

どこまでも児童一人ひとりの幸福に尽くす姿に、憧れをもつようになりました。その夢を追う中で、「幸福」について深く考えるようになりました。フィジーは「世界でいちばん幸せな国」として知られています。北欧諸国が強い「世界幸福度調査」とは異なり、フィジーは「主観的幸福度」だけを測る調査で3度も世界1位に輝いているのです

また、英検上位級を持ちながらもスピーキングに自信がなかった私にとって、フィジーのフレンドリーな国民性は「街中が英会話教室」そのものでした。この環境で実践的な英語を学びたいという想いも、フィジー留学を決めた理由の一つです。（ちなみに、フィジーの国民性について詳しく知りたい方は、まちライブラリーにもある『世界でいちばん幸せな国フィジーの世界でいちばん非常識な幸福論』（永崎裕麻著）がおすすめです（^^）

さて、私のフィジーでの留学生活はどのようなものだったのでしょうか？次回から、フィジーでの生活やカルチャーショック、留学を通して得た学びや成長について、2回にわたってご紹介したいと思います。

ゆーやけ.jpg



漂流せよー！

SF漫画まじりブリー

高校生の頃、一度だけ、万引きをしたことがあります（懺悔）。いきなりなんだという話だけれど、私、貧乏な高校生でした。いや、家ではなくて、「私」が貧乏。月お小遣い三千元ですべてを賄い。3年間着ていたコートは母のおさがりのトレンチ。朝の改札でよく呼び止められました、学生に見えなくて(笑)。父母に悪気はなく、私に自覚なく。さすがに高校3年からバイトを始めましたが、それまでは遊びに誘われるたび顔を引き攣らせる私を、なんだコイツと友達もさぞ困惑していたはず。さて、そんな我が高校生活の一部に、常に立ち寄る品揃え抜群の書店がありました。本は基本、友とまわし読みだったので、私たちは常連の上客。でも、ほぼ毎日、通学路の一部のように通っていたそこで、友人の貸してくれた本が素敵すぎてどうしても欲しくて……手を出してしまったのが、この本。清水玲子さんの『竜の眠る星』。謎めいた最高級万能ロボット エレナと、ドジで優しいロボット探偵 ジャックの描く機械の命と心は読んだ事のない世界で。ただ、家に持って帰った後の記憶はもうあやふやなんです(今、書きながら、猛省しております)、数日後、書店のおばちゃんにニヤッと笑って、言われた言葉だけは、忘れられません。「あの本、面白かった？」



珠玉のSF漫画をアナタに。No.002

『竜の眠る星』 清水玲子

「もともと 人間は100年以上
生きられないんだ。
もしたとえ
それ以上生きられたとしても
もう何も得るものはない」

『竜の眠る星』 作：清水玲子 全2巻 (白泉社文庫)

「竜王星」ケプラー系第3惑星。その名の示すとおり、この星には竜がいる。かつて一億年以上も地球を支配し、突然姿を消した恐竜が。24世紀のNYに住むお人好しロボット、ジャックと相棒の万能ロボットエレナは、探偵。依頼を受け、恐竜が棲息する惑星「竜王星」に赴くが、そこにはエレナの封印された過去が……！

人間が憧れて創り出した、「果てしない夢の結晶」である、「ロボット」。

人と同様に心を持つ彼らの、永遠のいのちがつくる不完全さに、何度読んでも涙目・への字口。この2人が好きになったら、

関連作品「ミルキーウェイ」是非(ノド)！

(文(無)責：大阪SF読書会 泉田)



歩いて痩せたら走ってた

梶野 猛

第6回 マラソン沼へ

2014年5月7日、ヤマダ電機で私はGPSウォッチなるものを初めて手にした。EPSONの割と手ごろな価格のモデルだった。秋に開催される大阪マラソンへの出走が決まったのだった。いよいよ、本格的に走らないといけないと思った。それにはモチベーションが必要だ。それがGPSウォッチで日々の走行記録をつけることだった。なにしろ、日々の記録をつけることの有効性は2012年に始めたウォーキングダイエットで実証済みだ。GPSウォッチはパソコンと連動させることができる。走った距離やコースはもちろん、1km毎のラップタイムも確認できる。ちなみに、一流ランナーは1kmを3分ぐらいで走る。私は6分から7分ぐらいはかかるから、比べるべくもないのだが、ラップタイムを確認していると、それだけでアスリートになったような気分だった。

大阪マラソン完走を目指してどんなトレーニングをしたのか。週末に走るだけでは心もとない気がした。とは言え、帰宅後の夜や出社前に走ることは難しい。自分で言うのもなんだが、この頃の私は仕事も結構充実していて、忙しかったのだ。そして私は、これまで歩いていた会社までの距離を走る事にした。早朝5時半頃に自宅から南海なんば駅まで走る。6時20分発の普通に乗って小休止。石津川駅から工業地帯を会社まで走る。私が勤めていた会社は工場と本社事務所が同じ敷地にあった。工場にはお風呂があった。会社に着くと夜勤明けの社員さんと一緒にお風呂のシャワーで汗を流した。服を着替えて、7時半頃には何食わぬ顔で事務所の席についた。他の社員さんが出勤する1時間以上前からメール確認や書類作成をした。なぜか、夕方はできる事なら早く帰ってジムに行きたかった。筋力トレーニングも大事なのだ。決して仕事をなおざりにしていたわけではない。しかし、当時の上司は私が夕方早々と帰ることを快く思っていないようだった。後に、その事実を聞かされた時は残念だった。

9月15日には、大阪マラソンで履くランニングシューズを購入した。ウィーキングを始めた時から愛用しているプーマのランニングシューズを心齋橋にあるプーマの店で買った。大阪マラソンに出るとスタッフの女性に話をすると、「頑張って、完走してください」と笑顔で言ってくれた。

2014年10月26日日曜日。私の初フルマラソン出走記

念日だ。朝からテンション上がりまくりだった。スタート前にウォーミングアップが必要なのだが、何を考えたのか、スタート地点の大阪府庁前まで歩いてしまった。これから初めて42.195kmを走るというのに、本当に馬鹿なことをしてしまいました。それでも、テンションマックスの私は大阪府庁前でスタートを今か今かと待っていた。既にスタミナをかなり消費していることをまったく理解していなかった。

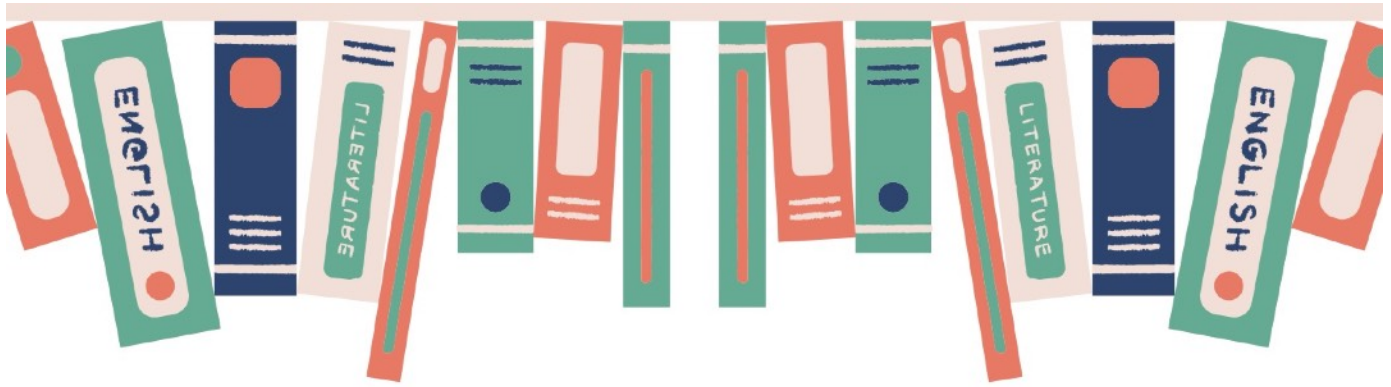
午前9時15分に号砲が鳴った。Eブロックからのスタートで実際のスタート地点まで20分ほどを大人数で歩く。ようやくスタート地点を過ぎて、なかなか走り出すことができない。ようやく走り出すと、舞い上がってしまい、自分のペースがわからない。玉造筋には早くも多くの方が応援をしてくれている。初めて応援してもらうという体験に心が躍る。

正直なところ、初マラソンで覚えているのは、30km過ぎの南港大橋を登りきったところで足が攣りそうになったことだけだ。4時間26分でゴールして、完走メダルが首にかけてもらったはずだ。そしてフィニッシュタオルもかけてもらったはずだが、その光景が思い出せない。ゴール後に過呼吸になってしまった。しばらく動くことができなかった。妻と娘、そして私をマラソンに誘った同僚と奥さんも心配してくれていたのだが、とにかく動こうとすると吐き気がする。コスモスクエア駅まで歩いて地下鉄に乗れば30分ほどで自宅に帰ることができる。でもタクシーに乗った。歩くことができなかった。家に帰りしばらく横になってようやく気分が良くなってきた。「完走したんだな」なんとも言えない嬉しさがこみあげてきた。

初マラソンから1週間後。私はランニングを再開した。ゴール後の過呼吸は苦しかったが、それで、「もうやめよう」とは思わなかった。走ることが、生活の一部になっていた。次にエントリーしている大会があるわけではなかったが、休みの日はほぼ走っていた。

2015年の大阪マラソンは10月30日だった。私は3時間57分でゴールした。いわゆるサブ4。マラソン大会にでる人のなかで4時間を切ってゴールするのは約20%と言われている。その仲間入りをしたのだ。この私が。わずか3年前まで体重85kgで走ることなど想像もできなかったこの私がだ。ゴールの後に手荷物を受け取り行くと、まだほとんどの荷物が置かれたままだった。その時の嬉しさを今も忘れない。

いよいよ次回はクライマックス。第1号の冒頭でスタートした2018年サロマ湖ウルトラマラソンの模様をご紹介します。



書きたい気もちを大切に

作 文 カ フ ェ



ドリンク片手に文章創作

毎月1回 18:30~20:00



まちライブラリー@もりのみやキューズモール

本文地下鉄中央線/長堀鶴見緑地線 森ノ宮駅より徒歩約1分

JR 森ノ宮駅より徒歩約3分



HAMON vol.6 (2025年3月号)

作文カフェ HAMON編集委員会 (まちライブラリー@もりのみや
キューズモール内)

発行日: 2025年3月15日 通巻6号